

椎尾辨匠師の「共生」思想形成史

菊 山 隆 嘉

研究テーマ

椎尾辨匠師（以下、敬称略）は、明治に生まれ、大正、昭和期に「共生」の思想を掲げ、広く活躍した人物である。この「共生」の思想は、単に概念にとどまらず、その実践として「共生運動」が展開された。大正七年の国民覚醒運動、大正十一年に鎌倉光明寺にて第一回共生結集を皮切りに全国で展開されていった。

椎尾は、「信仰」とは、人生、生活を正しい方向へ推し進める力であり、固定されるものではなく常に進歩・発展を伴うものでなければならず、それは「進行」であるとしている。であるならば、椎尾の「共生」の思想においても進歩や変化が見られるのではないかというのが、本研究の問題意識である。

前田恵学氏は、「共生思想は、「共生会運動」の中で、次第に形成されていった」と指摘しているが、その形成された内容については明らかにされていない。そこで本研究では、椎尾の「共生」思想形成について、考察を加えることとする。

研究の観点

椎尾はその生涯において、仏教学者、宗教者、共生会の師表、政治家、教育者等、多方面における活躍が見られる。椎尾が年齢を重ねるにつれ、また活躍の場面が変わるにつれ、伝える内容やその重点の置き方、伝え方にも変化がみられるはずであり、そこに思想の変化をうかがい知る可能性があると考えた。また、職責以外に椎尾の生きた時代には「戦争」という大きな時代の制約があり、ここでも思想に変化がみられる可能性があると考えた。

そこで本研究では椎尾の生涯を以下の六つのステージに分け、そのステージ毎に、椎尾の著作(主に『椎尾辨匡選集』)から思想の進歩、変化を抽出することとする。『日本語大辞典』(講談社)によれば、「思想」とは、「人生、社会、政治などに対する一定の見解。統一的、全体的な判断体系」と示されている。これを踏まえた上で、本研究における「思想の形成」とは、これまで主張されていなかったことが主張されるようになり、それ以降も引き続き同様の主張がなされている点を「思想の進歩」、「思想の変化」と捉えることにした。

ステージ設定

- | | | | |
|---------------|-------|---|-------|
| I. 出生、学道 | 明治九年 | ～ | 大正四年 |
| II. 国民覚醒運動の決意 | 大正五年 | ～ | 大正一〇年 |
| III. 第一回共生結集 | 大正一一年 | ～ | 昭和二年 |
| IV. 衆議院議員当選 | 昭和三年 | ～ | 昭和五年 |
| V. 戦時下(満州事変) | 昭和六年 | ～ | 昭和一九年 |
| VI. 増上寺御法主、終戦 | 昭和二〇年 | ～ | 昭和四六年 |

スティージー、出生、学童（明治九年〜大正四年）

椎尾は明治九年、愛知県名古屋市西区の真宗高田派円福寺に生まれる。浄土宗本校（現、大正大学）在学中に古事記、宗教学、哲学、日本史の研究を開始する。二六歳で東京帝国大学哲学科入学。梵語、巴利語の研究。卒業後東京帝国大学大学院入学。卒論は「梵天と仏陀」。卒業にあたり、成績優秀につき明治天皇より恩賜銀時計を拝受。引き続きシヤム蔵の經典部を研究。また、インドへの洋行を予定していたが母の逝去につき中止している。明治四三年、博士論文「釈尊よりシヤンカラ・アーチャリヤに至る印度哲学」を提出。

また明治四〇年に結婚し、長男が産まれるが明治四二年に亡くしている。母、そして子どもの死を経験したことが、浄土教への深い信仰につながったのであるがこのことは後述する。

この期間に書かれた啓蒙書として大正六年発行の『安心生活』がある。この書物を読んだ福原俊丸男爵が「家庭における宗教々育の一項に到って、真に共鳴するところあり」として椎尾に教えを乞い、その際に大正天皇が国民の生活を憂慮されていることを聞いた椎尾が国民覚醒運動を決意し後に「共生運動」を展開することになるのである。椎尾が「共生」という語を使用する前に書かれたものであり、当時どのような思想が展開されていたか注目したい。

〈信仰について〉

大丈夫の確固たる生活は偏に宗教的生活でなければならぬ^三。

とし、それには「信」をもって自らの生活をつかみ、自らの生活を徹底せしめなければならぬとしている。そして「信」、すなわち「信仰」のよりどころとなるのが浄土教であるとしている。この「信仰」は、共生思想の根幹をなすものであ

るがその位置づけはこの当時から変わっていない。

〈念仏について〉

『浄土宗要十講』に以下のように示している。

我等の心の儘に念仏し助け玉へと説く浄土の憶念称念は、陰妄の一念にして仏教中の完全なるものなれども、然かも手近の対境に手近の行事を以てせり大玄十念辨に憶念称念を分別す。之は云何なるものなりや、事實は異れり。

これ一往の別にして、吾人の憶念称念は心の上に一致せり²⁶。

として、称念と憶念とは一応の区別であつて同じものであるとしている。

この期間は、博士論文をはじめ、『十二因縁論』、『曇鸞当時の浄土教』、『六足論の研究』、『頼耶縁起論の研究』など学術的な論文が多い。これらの原始経典、縁起経典、アビダルマ、大乘仏教、浄土教の研究内容が後の「共生」思想の基礎となっていることは間違いない。それはこれ以降の主張のほとんどにおいて仏教教義を基準として主張が展開されおり、また『優陀那講義』のような最古の経典に関する研究は引き続き行われ、『釈迦に仏を見る』にあるように戦後に行われた法話でもこの期間の学術的なものを基礎としていることが伺われる。仏教者としては当然のことであるかもしれないが、椎尾の仏教の基準はあくまで「釈尊の生き方」なのである。

この時期の浄土教関連の著作として、「曇鸞当時の浄土教」、「選択本願念仏」、「往生浄土について」などがある。釈尊の示した仏教が地域を超えて浄土教にその真髄が現れており、凡夫である我らの生活信仰はこの浄土教に頼ればよいという説示は見られるが、いずれの著作においても浄土教が信仰に結びつく観点として具体的な説明が施されていない。

ステージⅡ 国民党醒運動の決意（大正五年〜一〇年）

この頃、修養団、一燈団、希望社等別の修養団体による運動が起こつてきていたが、それらの多くは感動、感激に重きを置いたもの、持続的でない変態作業に重きを置いたものが多かったようである。これらに対し椎尾は持続的、規律的である生活が必要であり、それには宗教的信念が必要であることを、様々な修養団体の会合に出席し主張した。また釜山、満州各地においても講演を行い、各地の国内工場に赴き教化に努めた。運動を展開するにあたり、当初は教育界、政治界、諸宗連合の方面においては時機が適していないとして、まずは浄土宗一宗を挙げた時局覚醒運動に着手した。その際の指導内容は、正義、業務、時間、節約等の項目を掲げ、仏教信仰に基づく国民生活の覚醒改善に努力した。

この頃の著作である『人間の宗教』、『社会の宗教』からその主張を見ていきたい。『人間の宗教』は大正十一年十一月発行で二灯会での機縁につづいて講説されたものである。また『社会の宗教』は『人間の宗教』の姉妹編であり、本来大正一二年に出版されるべきものが関東大震災の影響で遅れたものであり、第四章、第五章、第六章はこのステージの主張とみなしてよい

（人間の宗教、社会の宗教について）

これらの著作では、著書名の通り、

宗教は人間のもので、人生の中に求められるべく、人生一日真なる能わずば永劫もまた真なるを得ない。仏教はこの見地においてことに知恩報恩に発して研磨改善不断向上の一路に真人間を認め、個人に非ず社会人に非ず、小にも大にも常に真実たらんことを求め、労働に非ず資本に非ず、貧にも富にもつねに真生命に住せんことを主張する

ものである。⁴

つまりは宗教は神や天のためのものではなく、今を生きる我々人間の生活のためのものであることを主張する。

宗教は人間のものなれば個性に偏局するよりは通達すべきものであり、自己一人の榮枯浮沈に没頭せんより祖孫衆生に偕暢すべきものであるとすれば、宗教は孤独の所有や解脱でなくして社会の宗教たるべきものである。⁵

つまりは宗教は個人が山に籠って解脱を目指すようなものではなく、関わる衆生すべて、子孫末代にわたるすべてが伸びていくためのものであり、社会の宗教なのであるとしている。

〈浄土教について〉

この中では椎尾が理解した「浄土教の特色」が述べられている。ここでは自身の述べた内容が「一般の考え方とことに食い違っていたであろうと思われるのは、浄土教についてである」としており、椎尾自身も「新たな解釈」を試みていることを自覚していたことがわかる。

浄土教ではわが身をいかに社会的に見るか、浄土教ではつねに自分を顧みて「罪惡の凡夫」なりと自覚している。個人主義よりいえばつまらぬものである。個人主義においては個人の尊重自我の尊嚴を主張す。罪惡のかたまりとはどうしても考えられぬ。ところが社会的にこれを眺めると特別に何にもできぬつまらぬものとハッキリわかつてくる。⁶

浄土教の個人的方面は従来多く考察されていた。これ封建時代の畸形的社会にしばられた偏見である。浄土教の特色はむしろ社会方面にある。我。人。仏。救。浄土。同行。往生。成仏。みな社会共存の上において始めてその意

義を全うするものである。^{三三三}

これらは「社会の宗教」の見地から見た浄土教であるが、椎尾の主張の通り社会的観点からみると理解しやすくなるものがあるのも事実であると感ぜられる。

椎尾が仏教を「人間の」、そして「社会の」宗教と捉え、その抛り所となる善導浄土教、殊に凡夫観を研究したことにより、覚醒運動の名を「共生」としたのであろう。ちなみに「共生」の名前は共生結集が開かれるための準備会合において椎尾自身が決めたものである。

〈念仏について〉

念仏生活には尋常、別時、臨終の三種の行儀があるが、浄土の詮要とする念仏生活は尋常念仏であることを示した上で、

尋常念仏の生活は、「ただ、往生極楽のために、南無阿弥陀仏と申す」生活である。心行具足の念仏である。一念でもなく、多念でもなく、別行でもない。ただ信心にもあらず、ただ称名にもあらず、心行具足になれる渾一生活である。信行の前後は各人修養の意楽による。往生極楽のため、すなわち、永遠に真実の生命が客観化せざれば止まずとするのである。死んでも止まない永遠である。(中略)三業四威儀の所作の全体が尊き念仏の生活であり、真人生である。^{三三三}

として、称名のみには捕われず、信仰とその所作が本当に生きるためのものであるのが尊い念仏生活であるとしている。

〈阿弥陀仏について〉

『人間の宗教』において浄土教の阿弥陀仏の存在について明確に説明がなされている。

頼まれてなすのでもなく、なして誇るのでもなく、なしてなおなせることを知らざる底のものである。これすなわち浄土教の絶対救済力であり、本願力であり、強増上縁である。攝受衆生の力であり弥陀仏である。^x

浄土教の立場から眺めて、彌陀を信ずるといい極楽に生ずるといっても、畢竟するに真の永遠の生命を信ずることである。いまの一瞬間にもすべての人の心にも一切の仕事にも生活にも、つねに輝くかぎりなき光明でありかぎりなき生命であるのが真の永遠の生命であり、これすなわち無量とよばれ給う阿弥陀仏である。

〈教育について〉

『社会の宗教』^zにおいて日本の一般教育について、長所と短所を指摘している。

長所として挙げられているのは、

一、教育の基礎が大変古く、だんだんと民衆に浸潤していったこと

二、学問を尊重する思想があること。

三、師範教育が発達していること。

の三点である。これに対し短所であり覚醒が求められる点としては、

一、教育内容に公正な自由が保障され発達しなければならないこと。

二、学校のみでなく、一生を通じ家庭より社会まで、店舗も工場もことごとく教場である全生教育を充実させなければ

ならない。

三、長所の半面を伴える短所の補充が必要である。例えば学問の尊重が偶像崇拜にならないように、師範教育の発達が画一形式となり自由思索がすくなくなり生気が乏しくならないようにしなければならない。

四、信仰教育を徹底させなければならない。

以上、この時点においては多少の説明が施されているが項目をあげるにとどまっている。

〈婦人の覚醒について〉

婦人の覚醒すべき点についても項目が挙げられている。

一、国防の大任は傭兵や一部軍籍者の任務でなくて全国民の負担であるとき、婦人がその責任を覚醒し一層剛健でなければならぬ。

二、殊に婦人が妻であり母であることを本性とすることにおいて家庭の整理、静察修養、子女教養が重要である。仏母、すなわち自らが覚醒者として子女の人間たる発育を開導する存在になる必要がある。

三、婦人が忍耐、堅実、貞操、賢明の徳を具えねばならないが、そのためには信仰生活の教養が必要である。

四、婦人向けの大学教育等の教育の向上と、職業の増加が必要である。

ステージⅢ 第一回共生結衆（大正十一年〜昭和二年）

大正十一年、第一回共生結衆を鎌倉光明寺で開き、その後も各地から結衆開催の要求があり、釜山、大阪、高崎、増上寺にて結集を開催する。その後も年を追うごとに開催は増加の一途をたどり、開催場所も当初は大都市で行われてい

たが次第に地方にも展開されていった。結集における生活は朝五時半の起床に始まり、掃除、体操、おつとめ、講義、食事、入浴、唱歌遊戯を行い夜十時の就寝まで十七時間の緊張生活を五日間行うものであった。平常の生活を中心とし、目標とする「共生」においては、結集中の時間割も平常生活を標準として作成し、結集を「共同生活の実際訓練」と位置づけていたようである。

また大正一二年五月、共生会より雑誌『共生』が創刊され、以降通常毎月発行された。

この『共生』発行初期である大正一三年一月～二月に連載されたのが、共生思想の根本精神が表されたともいえる『共生講壇』である。構成は、序講の「共生の主張」から始まり、「帰敬三宝章」、「人生章」、「真生章」、「慚愧章」、「如来章」、「白道章」、「極楽章」の全八章から成り立つており、各章のはじめには椎尾が経典から抽出、もしくは独自に作成し、『共生のつとめ』で用いられている朗読文が配され、講述が施されている。ここでは、

- 一. 人間はどのような存在であるのか
 - 二. 正しく生き、真に生きるとはどういうことか
 - 三. 慚愧と懺悔
 - 四. 如来とはいかなるものか
 - 五. 真生を実現するには
- について説明がなされているが、「宗教は非天教ではなく人間教である」とした椎尾らしく多くの仏教教義を用いながら、すべて我々の生活に結び付いたものとして説明がなされている。例えば、「六道」は苦辺行と楽辺行を細分したものと捉え、「天上道」は

知足の楽辺者は金持ちの楽隠居か乞食を代表とします。一方は有って満足、他方はなくて満足両者ともブラブラと

して働くことを知らない、有るは有るでかかえ込んだままノンキに座り込んでいる、無いは無いで安心して無いがましかや気がらくなで三日すれば生涯その味を忘れられぬと云う、是れ天国であります

と説明がなされている。また「五戒」は、仏教が正命として正しき生活の標準とし、「不邪淫戒」は

男女の道正しからざるを戒めております。これけだし、能率を妨げるものは男女の不貞不倫に越すなきゆえんであります。夫不倫に婦不貞に、おのおの勝手気ままな振舞いをしておつてどうして能率が上がりましょう。八万四千の法門は皆ことごとく能率の増進を教う。最高能率の無駄なき生活は仏教の終始主張するところであります。

としている。これらの仏教教義に関する説明はこれまでの著作においても行われているが、より生活に近いものとして説明されているものも見られる。

〈阿弥陀仏について〉

我が今日の生活は一切共同力の上のものであると気付くことが即ち「四十八願 摂受衆生 乗彼願力 定得往生」の要領であります。宇宙の発展が覚醒意思となり、意思の選択決定が願力となり、願力の選択が四十八願意思となつた。その願意思には一点も自己のためにし給へるものなく、その身もその浄土も挙げて衆生の為であり私共の為であつた。¹¹¹⁾

ここで「宇宙の発展が覚醒意思となり、意思の選択決定が願力となり、願力の選択が四十八願意思となつた」という説明は、前ステージの『人間の宗教』には表されていない点である。

全体を通してこれだけ体系的に説明がなされたのはこの『共生講壇』が初めてである。これから共生運動を展開していくにあたり椎尾自身の教義の体系化と再整理が行われたものとみられる。

次にこの時期に「浄土宗内に投ぜられた爆弾的な著書¹⁾」とも言われた『開かる、は死か生か』という著書についてである。この著書は大正一三年、京都市岡崎公会堂にて法然上人開宗七五〇年記念講演に述べられたものの腹案であり、雑誌『共生』においても同年三月、四月に掲載されたものである。当時行われていた念仏が法然上人(以下、「法然」)の精神から離れて、形式のみに捕らわれていないか、極楽を物質的結構として固定化してはいないかと警鐘を鳴らした内容となっている。

この中で椎尾は、

(法然) 上人のいける人格は実にその人間愛と研究力との結晶であり。一代不息の進歩たるところに存する。これこそ儀表たるべき真の人格である。かかる人間愛と研究力との体现はいきたる念仏者であり、その生活は念仏生活で、順彼仏願の南無阿弥陀仏の中に、常に人間愛と研究力とによる向上体現が完了せられたのである。もしこの生活なき念仏の声の相統は、蓄音機の称名相統に過ぎない²⁾。

とし、法然の一代は父への思い、そして平等往生を願う「人間愛」と、選択本願念仏を確立した「求道心」の賜物であり、その生ける人格と活きたる念仏を明らかにしている。

また、

(法然が) 山学の空虚僧兵の横暴に望みを絶ちて隠遁したものとすることをしるも、これ青僧の胸に燃ゆる青春の血の叫びであり、知らぬ恋路に妄信するように、あらゆるものを摧破し一物を得ずは已まざらんとする全人的勢力の表現であることを忘れてはならない。隠遁のみが法然ではなくて彼には身心の典型的発達があった。これを遡って天々たる少年、東西も明らかでない孩嬰から察しきたらねばならぬ³⁾。

とあり、真人生には信仰、即ち真実の進化がなければならぬとする椎尾が法然の人格の中に真実の進化を見出そうとする姿と見受けられるが、この時点では具体的主張はなされていない。

この時期『優陀那講義』、『授戒講話』、『共生の基調』等趣深い研究、講述がいくつもなされているが、こと「共生思想」に一番影響を与えたと思われるのが『善導大師の研究』である。本著作は雑誌『共生』において昭和二年一月（翌年七月迄連載され、昭和三年の大正大学学報第四号に掲載された「善導教義の特色」を加えたものが『椎尾辨匡選集』第四巻に収められている。椎尾はこの著作において、善導を「釈尊以後の釈尊、仏のなかに唯一の仏として仏教を明らかにした人」と捉えており、仏教を釈尊の生きた道と捉えている椎尾には善導の有難さを感じられていることであろう。では善導に対する椎尾の捉え方を見ていくこととする。

〈当時の仏教に対する善導の改善点について〉

当時の中国において経典を読むことが利益であるとされていたが、善導は

『般舟讚』では経典をただ読むのではなく、その経が懺悔・発願となり、いろいろな讚美歌にもなるようにし、『往生礼讚』では礼讚を取り入れ行者が一向しやすいようにし、『法事讚』では立派な仏、道場の中に香華の莊嚴供養を整え、そこに音楽と舞踏と取り入れ、そこに仏を勧請し、その仏菩薩の集まれる御前で一切懺悔し礼拝供養し、一切善根を随喜し今まで成し得た善きことを回向するようにした。そしてこれらのことをすべて母国語で行えるようにしたことは民衆に対し仏教への親しみやすさを仏教が生活と一体となる力を与えた。

としている。当時形式にとらわれていた感のあった仏教を、善導は生活の中に組み込み、民衆が信仰しやすいように研

究、改善を施している。これは形骸化を嫌い、「真人生は信仰である」とする椎尾の思想に通じるものであり、また共生運動を展開するにあたり、信仰に生きる釈尊に続く実例を得たと感じられたのではないだろうか。

〈経典の読み方について〉

善導は経典を独特の読み方をする事について指摘している。例えば「本願念仏」、「凡入報土」、「九品皆凡」といった思想は当時の仏教界では常識を覆す程の全く独特な思想と言つてよい。このことについて椎尾は、

今までの経文はヨソのことで、人間界のことでないと言われていました。インドの古い時代のことであるか天国の書が隔世の古文書を見るような考えで扱っておりました。しかるに善導大師はこれらの経典は自己信仰の指南書である、このなかで何事をわたしに教えてあるか、その書がどんな話かと遠方のことにせずしてわたしのもとのせんとせられました。しかし大体古今において思想の水平線に似よつたもので共通点があり、自分に対する教えがそのなかにあるとみられました。それゆえに経典に親しきをもつて考えられました。これシナの訳経者講経者がみな失敗されたなかに善導大師ひとり成功した所以であります¹²⁵。

とある。すなわち善導は自らの信仰をもとに仏教を捉え、一切経と向き合いその結果として凡入報土を説く三部経に行きあたつたとするのである。一方で椎尾は自身の仏教の見方について、

わたしが今日仏教のみかたにおいてほかのひとびととちがうのは、文字の上のみでなく信仰の上からみるのからであります¹²⁶。

とも語っており、善導がどこまで自らの信仰で経典を見たかについては客観的な検証が必要であろうが、椎尾の目にはまさに信仰に生きる善導の姿が釈尊亡き後の釈尊と見受けられたのであろう。

〈縁起について〉

椎尾は縁起の見方について、大乘経が三種に分かれると主張している。

- 一、縁起のゆえに空なり、無自性なり、平等一如なりとするものである。これは般若経が主で、楞嚴、維摩等にもみる
- 二、縁起は心なりとするものである。色法、物的諸法は因果的連鎖であるが、心は重々の相応関係にある。空と云い平等というに差し支えないが、空平等のよく現われたるは心であるとする。心真如とし清浄心とするものと、唯識隨縁とする二つがあり、華嚴と楞伽深密とはその両面を示している。

- 三、縁起を願とするもの。いづれを真の縁起相とするかについて清浄心、仏心大慈悲心の諸衆生を撰取するところをもつて完全なる縁起であるとする。すなわち願である。執持と向上とを完うするところに信とし、淨化向上してゆくものであるが、自我執を否定して真如実相に相応し、無常に進展止まざるところ、すなわち仏果無上菩提を求めるところに願となる。

無論椎尾の見方は「縁起を願とするもの」であり、これにより前ステージの「願力の選択が四十八願意となった」の部分の説明を与えたのであろう。

ステージⅣ 衆議院議員当選（昭和三年～五年）

昭和三年、初めて僧侶に被選挙権が与えられた第一回普通選挙に当選し衆議院議員となる。昭和五年の選挙に立候補したが落選。昭和一二年の選挙に立候補し当選を果たし昭和一七年に議員辞職するまで務める。衆議院議員となり新たな活躍の場が椎尾の思想に影響を与えたかを見ていきたい。ただしこの期間中、議員でない期間が存在し、また戦争が

本格化するなど他にも大きな影響があるため、衆議院議員としての活動とそれに関連するとみられる著作から思想をとらえていきたい。

〈立候補の背景と趣旨について〉

そもそも椎尾自身、自らの意思で立候補したのではないようである。『椎尾辨匡選集』第十卷「昭和維新に際して政界への進出」に立候補に到った経緯が記されている。これによると椎尾は僧侶の被選挙権問題に対し、大乘仏教の精神、立法の公平の観点から被選挙権が与えられるべきだと主張していたところ浄土宗から仏教連合会候補として公認された。当初は断るつもりだったが、地盤開拓や思想上の準備のないものが立候補しても仏教教勢の失墜になると感じたこと、各階級に関係して調和の安全弁の役割を果たし民衆運動の指導ができる者が立候補しなければならないと感じ立候補に到ったようである。また立候補に伴う政見は以下の五項目である。

- 四、昭和維新の実現(官民更始一新して真人生による活日本の建設)
- 五、同胞生活の達成(同胞間の差別を打破し分業協調による共生共栄の社会政策)
- 六、国策の確立(精工業の分化による国力の充実と正義の実現による国際的発展)
- 七、分権と統一(交通、教育、警察、司法、国防の統一と産業的分権)
- 八、剛健精神の涵養(教育宗教の振作、実務人格の陶冶、無産者教育の施設)

当時政友会と民政党の二大政党が対立していた時代であるが、椎尾は中立の立場に身を置き「共生」の精神で政治を行う主張をする。そして新人議員ながら、母子保護、未成年者禁酒などについて尽力する。中でも注力したのは教育についてである。義務教育の制度について、そして教育自体を「有信有業」の教育にすることを主張していく。その主張

がまとめられているのが一九二八年(昭和六)に発行された『有信有業の教育』である。これまでも教育に関しては、信仰に基いた教育が必要であること、全生教育、師範教育、女子教育の覚醒充実が必要であることは主張がなされてきたが、本書においては教育と宗教が両輪となってそれらを論理的、体系的に説明している。そして当時の普通教育に関する問題点が指摘され、各教科の指導方針についても「共生」の精神のもと、信仰を持ち前に進むように伸びるように主張している。

椎尾の政治家としての活動は、政党に属さず、戦況も逼迫し自分の思い通りの活躍ができたわけでないであろう。椎尾自身、

無駄道を歩んだようではあるが、産業、教育の中にも信仰をもってゆくことができると考えたように、政治のなかにも信仰をもって実際やってゆけるということがわかり、かつ実世界の赤裸々の姿をみることができ、地についての信仰を体験することができた。(中略)私がもし十五年間まごつかなかつたならば、観念の遊戯たる信仰に終わったかも知れぬが、本当の生活のなかに宗教ありとの意を強くしたのである。以下略

と述べているように、確かに全て上手くやれたわけではなかったであろうが、思想信仰のみにとらわれず、政治、産業、教育という実世界を手掛ける立場に身を置いたことは以降の活動に大きな力となったであろう。

ステージⅤ 戦時下(満州事変) ～ (昭和六年～一九年)

昭和六年、満州事変が勃発。椎尾は「満州を取つてはならぬ共生せよ」との主張を展開し軍部から種々の圧迫を受ける。昭和十一年、衆議院議員当選。二・二六事件が起こる。この種の動きを阻止すべく努力するが防止に失敗。昭和十三年、議会が解散し、選挙に立候補。当選。教育審議委員となり審議会で成案したが、支那事変が勃発した為空文と

なった。昭和一六年、腸ねん転により開腹手術を行う。八月の開戦により、自分が議員である必要がないことを自覚し、次の選挙に出ないことを表明する。この期間は、満州事変に始まり、二・二六事件、さらには太平洋戦争開戦と日本自体が大きく混乱する中、仏教者として、政治家として指導力を発揮することとなった。この混乱を極める中、椎尾はおかれた立場の中で大いに苦悶した期間であると推測される。

この期間の思想には大きな、また複雑な要因が存在するため、資料収集の上、時を改めて論述したい。

ステージⅥ 増上寺御法主、終戦（昭和二〇年～四六年）

昭和二〇年三月大本山増上寺法主就任するが、五月増上寺焼失。就任後五か月足らずの八月終戦。戦後は英霊慰霊と共に遺族の法要法話慰問激励にあたる。昭和二三年、内閣に設置された教育刷新審議会の臨時委員を受ける。これは帝大時代の学友であった首相の吉田茂からの打診により実現した。昭和二四年、着実、勤勉、正直、正心を全国に説く。昭和四六年、九五歳で遷化。この期間雑誌『共生』への執筆を重ねる傍ら、多くの著作を手掛けていく。この期間に注目すべき点は、『日本浄土教の中核』、『法然上人のこえ』という法然に関する研究がなされている点である。これらはそれぞれ、法然の思想史、『勅修御伝』二一の上人つねに仰せられけるおことばに関するものであり、さらに大本山増上寺における加行における法話をまとめた『信行の歩み』、『法然上人の影』でも法然について多く主張されている。これは明らかに椎尾がこの時期に法然の再研究を行ったことが伺える。これらの著作の中から新たな思想と考えられるものを挙げる。

〈戒について〉

率直の反省に南無阿弥陀仏するなかに、真の受戒の喜びも深く、仏祖の恵み経戒のありがたさを感謝し、如何にも他力念仏の中に如来大戒を頂いたものとなったのである。^{xx}

と説いているが、大正六年発行の『安心生活』では、

法然上人が三学無分として長時の念仏生活を事としする所に却って真の戒増長の生活ありと信ずる^{xxi}。

と説くにとどまり、昭和七年発行の『授戒講話』においては、戒と律との違い、念仏は戒であることが述べられているが、ここではさらに法然の念仏の中に戒を見出している。

〈大法然義について〉

相応部と雑阿含にある經典中に釈尊の成道のときに宣誓された言葉である「法として然り」が語源であるとした上でその意味については、

私たちの一息一息を完全に生きるのである。絶対に大きな力に打ち委せ、ただいまを一番真実に生きるのである。

どうすればそれができるのか。それは絶対の生きる力、生かす力のままである。お育てのままである。ということとは、そのときに、一つの生きた姿があるからです。当面したそのことに、南無阿弥陀仏をして邁進するのみです。

と説かれている。これまでも「本当に生きること」という説明は何度も出てきていたが、それを「大法然義」と名付けた。もちろんこれは法然を思い起こさせる言葉であり、このステージにおける研究を通して椎尾が法然の生き方の中に「本当に生きる」姿をみたことが伺われる。

〈椎尾の回心について〉

『法然上人の影』において、法然が「一心専念の文」を見たことについて、

私はその三四文字が星のごとく輝いたという見方はただしいとおもっている。私は三三の年に初めて強くそれを見た。その前に三〇歳の二月から三月の間にそういう体験をたくさんもった^{xxxiii}とあるが、この時期はちょうど長男と母を亡くした時期である。椎尾の「回心」において「一心専念の文」が浮かび上がってきたのであり、阿弥陀仏、念仏を深く感じるようになったのであろう。

これらの法然の研究を通し、椎尾は法然の生き方の中に釈尊、善導を見たのであろう。そしてそれが大法然義の思想につながっていったと言えるであらう。

まとめ

以上椎尾の思想をステージに分けて見てきたが、大きく「共生」思想としてまとめると、

ステージⅡ 共生の基礎

ステージⅢ 共生のテキスト、思想の確立

ステージⅣ 理論的なものより感覚的、経験的なものへ

となるであらう。

しかし、ステージを通して一貫していることは、椎尾は「信仰」を基幹にすえており、自らの信仰を通して生活、研究、共生運動を含む布教に取り組んだということである。

- 一 前田忠学「椎尾辨匡師と共生の思想」(『印度学仏教学研究』第四十五卷第二号)
- 二 椎尾辨匡「文化の權威」『椎尾辨匡選集』第七卷 二六三
- 三 椎尾辨匡『安心生活』一一一
- 四 椎尾辨匡「選択本願念仏」『浄土宗要十講』三二二
- 五 椎尾辨匡「人間の宗教」『椎尾辨匡選集』第七卷 九
- 六 椎尾辨匡「社会の宗教」『椎尾辨匡選集』第七卷 六
- 七 椎尾辨匡「社会の宗教」『椎尾辨匡選集』第八卷 一六一
- 八 椎尾辨匡「社会の宗教」『椎尾辨匡選集』第八卷 一六六
- 九 椎尾辨匡「人間の宗教」『椎尾辨匡選集』第七卷 二五六
- 十 椎尾辨匡「人間の宗教」『椎尾辨匡選集』第七卷 二六三
- 十一 椎尾辨匡「社会の宗教」『椎尾辨匡選集』第八卷 二四五
- 十二 椎尾辨匡「共生講壇」『椎尾辨匡選集』第九卷 一八六
- 十三 椎尾辨匡『喜寿記念 椎尾博士と共生』九〇
- 十四 椎尾辨匡「開かるるは死か生か」『椎尾辨匡選集』第五卷 四三〇
- 十五 椎尾辨匡「開かるるは死か生か」『椎尾辨匡選集』第五卷 四二四
- 十六 椎尾辨匡「善導大師の研究」『椎尾辨匡選集』第四卷 一九一
- 十七 椎尾辨匡「善導大師の研究」『椎尾辨匡選集』第四卷 一二五
- 十八 椎尾辨匡「東亜教学のために・議會を訣れて」『椎尾辨匡選集』第十卷 一四四
- 十九 藤井実心「共生三十年史」『喜寿記念椎尾博士と共生』一〇九
- 二十 椎尾辨匡「日本浄土教の中核」『椎尾辨匡選集』第五卷 五〇
- 二十一 椎尾辨匡『安心生活』一一一

※: 椎尾辨匡「法然上人の影」『椎尾辨匡選集』第五卷 二一〇

キーワード 共生、椎尾弁匡の思想

(さくやま たかよし 共生文化研究所 研究員)